

Title	フィリピン・カリンガ州パシルにおける近代医療の受容メカニズム
Author(s)	尾上, 智子
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/26077">https://doi.org/10.18910/26077</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

〔 題 名 〕

フィリピン・カリंगा州パシルにおける近代医療の受容メカニズム

学位申請者 尾上 智子

本論文は、フィリピン・カリंगा (Kalinga) 州パシル (Pasil) におけるゴパス *Gopas* と呼ばれる儀礼の中の「『遊び』の過程」の分析を通じて、「規範／反規範」の対立軸が無化され、両者の枠組みが再調整されるこの過程が文化変容における緩衝帯となっている可能性を示唆しようとするものである。

本論文が研究対象とするカリंगा州パシルは、ルソン (Luzon) 島北部の急峻な山々に囲まれたコルディリエラ (Cordillera) 地域に位置している。比較的孤立した生活を営んできたコルディリエラの山地諸民族は、民族ごとに差異を有してはいるながらも、多くの社会的・文化的特徴を共有しているために、人類学者たちの比較研究の格好の場となった。伝統社会として研究されてきたコルディリエラ諸社会に見られる近年の社会的・文化的変容の現象に関しては、近代化と諸社会との関係が単線的な見方で捉えられがちであり、諸社会における外部要素を取り込むメカニズムを考究する研究はみられない。ヒト・モノ・カネ・情報の地球規模での流動化に伴って、外部から流入する、あるいは導入される多様な視点を、コルディリエラの諸民族はどのようにして内部化するのだろうか。

本論文では、社会の中の「中間的領域」が文化変容のメカニズムを説明し得るのではないかとの見通しのもとに、この問いに対する解答を試みた。こうした見通しを理屈づける理論的枠組みは、従来の象徴論研究が両義性の前提としてきた2項対立的図式を踏まえた上で、「社会の中には『規範』とも『反規範』とも呼び難い社会の構成員の行為が現出する余地が存在し、その余地の存在が社会変動の要因になっている」というレナート・ロサルドの論考を参照し、従来の2項対立的図式を解除して「規範／反規範」の枠組みを再調整する「中間的領域」を設定するものである。この理論的枠組みに沿って分析を行うために、本論文では、身体社会学における「身体は社会によって管理されているものであり、社会は身体の管理によって成立している」との観点に立ち、①身体の管理に関する議論、②身体性と社会関係の揺らぎに見る多元的医療体系、③身体性と社会関係の交渉の場に関する認識人類学的空間認識、という相互に関連し合う3つの分析層を用いた。

これらの理論的枠組みと方法論的枠組みを基に、本論文では、パシルにおけるフィールドワークで得られたデータに即して次の2点について論じた。1点目は、パシルにおけるゴパス儀礼の一部を構成している「遊び」の過程において、人々の日常空間に見られる身体性と社会関係からの「ずれ」がシャーマンとアシスタントの老婆たちによってクローズアップされ、その「ずれ」が「規範／反規範」を類別する軸を無化し、両者を相対化することによって複数の身体と社会関係の在り方を人々が内部化する余地を生むということである。「遊び」の過程のような領域を本論文では「中間的領域」と呼び、「規範／反規範」のそれぞれの要素が相互に交渉したり浸透し合ったりしながら、両者の枠組みが再調整される領域として定義した。2点目は、こうした社会の中の「中間的領域」の存在が、パシルの人々にとって馴染みのない身体性と社会関係を前提とする近代医療が人々に受容される仕掛けとなっていることである。対立する2項の要素が相対化される領域としての「中間的領域」は、外部から流入する、あるいは導入される新しい要素を吸収する「文化変容の緩衝帯」となっていると考えられる。

コルディリエラの一地域を対象として、伝統的な暮らしをしているようにみえる人々の社会の中に外部の要素を受容する仕掛けを見出そうという本論文は、民族間の差異を一方から他方への変化として捉えたり、人々の生活に見られる社会的・文化的変化を「伝統」から「近代」への移行とみる近代化論的図式のもとに捉えたりしがちであったコルディリエラを対象とするこれまでの地域研究に対して新たな視座をもたらし得ることが予期される。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 尾上智子 )			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	准教授	宮原 暁
	副 査	教授	河森正人
	副 査	教授	Richard Zgusta
	副 査	准教授	鈴木広和

## 論文審査の結果の要旨

尾上智子氏の学位論文「フィリピン・カリガ州パシルにおける近代医療の受容メカニズム」は、筆者がフィリピン・ルソン島北部カリガ州パシルでおこなった現地調査にもとづき、守護聖人の継承と病気治療の儀礼であるゴパス儀礼の解釈を試みたものである。

ゴパス儀礼の過程には、筆者が「遊び」と呼ぶ、儀礼の他の部分とは明らかに異なる部分がある。そこでは主催者が、儀礼で供犠された豚の内蔵等無邪気に手にもって遊び、儀礼の緊迫した雰囲気とはうってかわって、雑然とした雰囲気が場を支配する。儀礼が強調し、再活性化したはずの、身体や社会関係をめぐる規範とは相容れない行為が展開されるのである。本論文は、こうしたゴパス儀礼に見られる意味の空白を、「中間的領域」という語でとらえ、そこに過渡的段階としてのコミュニティ以上のものを見ることで、病気治療をめぐる従来の規範が無化され、それとはずれた、例えば近代医療の根底にある身体観や社会関係に対する見方が受容されるメカニズムを分析している。そうすることで、コルディリエラ地域の文化変容が、近代と伝統の対立図式においてとらえられるのではなく、社会に備わったメカニズムによって可能となっていることを明らかにした点が、本論文の第1の到達点である。

コルディリエラ地域研究、さらにフィリピン地域研究では、例えば、ボントックのオープン・クロードなムラの構造やイロンゴットの生業空間の構造など、これまでも認識論的な中間的領域の存在を示唆する議論が行われてきた。しかし、本論文では、そこから一步すすんで、ゴパス儀礼に見られる中間的領域を、意味世界が拡大される「遊び」の過程と解釈し、およそ身体観としては従来の身体観とは相容れない近代医療の身体観すら受容可能にするメカニズムを分析した点で高く評価できる。

ゴパス儀礼の解釈を行う前提として、本論文では、調査地であるカリガ州パシルにおける病気治療の実態に関する綿密な記述を行っている。筆者の調査地に限らず、東南アジアでは、しばしば近代医療と伝統医療の併存が見られるが、両者の関係をどう捉えるかということが、医療人類学にとっての課題の一つとなる。筆者は、パシルの住民が所与の社会関係において、臨機応変に治病戦略を選択していることを指摘するとともに、そうした選択がなぜ可能になるのかと問うことで、本論文での考察の出発点としている。

その際、近視眼的に、治病をめぐる事実のみに着目するのではなく、パシルの人たちの家族や親族組織、村落構造、生業、身体観、信仰、儀礼、芸術、ライフサイクル、係争処理等に関する詳細な民族誌的データを積み上げることで、近代医療の受容メカニズムをホリスティックに捉えようとする。この点は、個々の民俗誌的記述が持つ価値とともに、コルディリエラ地域研究に大きく貢献するものである。

コルディリエラ地域研究への貢献という点では、本論文は、もう一つ重要な貢献を行っている。そ

これは、コルディリエラ地域の生成原理に関わっている。コルディリエラ地域には、主なものでも10の言語や生業を異にする民族言語集団が居住しているが、それぞれの集団は、独自の言語や社会組織を維持しながらも、ボドンと呼ばれる平和協定にも見られるように、他の集団との間に交渉のチャンネルを持っている。そうしたことがなぜ可能になるのかということに関して、本論文は、中間的領域の機能に着目して説明している。こうした視点は、1つには、コルディリエラ地域の生成に関して有力な仮説を提示しているという点で、2つには、不可逆的な近代化として記述されることの多かったコルディリエラ地域像に修正を迫るという点で、さらに3つには、コルディリエラ地域社会のなかでの規範の意味を再考するという点で、同地域研究に、新たな知見をもたらしたと言えよう。

本論文のもととなる現地調査は、2009年4月から2011年3月までの2年間の長期滞在を中心部分とし、2005年5月から足かけ6年にわたって行われた。調査地であるカリంగా州パシルは、フィリピンの首都マニラから遠く離れ、最寄りのバス停からはもちろん、域内の移動にも徒歩で1日以上かかる生活環境が過酷な場所にある。本論文は、そうした環境でごく最近まで電気もなく、動物性タンパク質の摂取不足に陥りながら行われたフィールドワークにもとづき、近代医療の受容メカニズムを明らかにするとともに、パシルの人たちの詳細な民族誌的データを提供している。

以上のように、本論文は、コルディリエラ地域研究に大きな貢献を行っており、博士（人間科学）の学位授与にふさわしいと判断された。